

|  |  |
|--|--|
| 課 題 名  | 省力育林技術に関する試験   |
| 開 発 期 間  | 開始年度 38年度 調査年度 4.6年度<br>終了(見込)年度 47年度  |
| 開発担当者所属氏名  | 局造林課 調査係長 浦 塚 勝<br>林試九州支場育林第2研究室長 尾 方 信 夫  |
| 経 費  |  |
| 開 発 目 的  |  |
| 下刈作業の省力化を目標として生理生態的な面からその可能性を検討する。                       |  |
| 開 発 計 画  |  |
| ヒノキ試験地については、遅れて設定したので本年度は定期的なススキ草高の刈りそろえと、造林木の成長量調査を実施する |  |
| 営林局における開発結果の<br>評価および普及計画の概要                             | 1. ススキについては、この実験で下刈終了時得たのであるが、事業的に新技術として定着がりが無い、地位の吟味がなされていない経過について、地位別、林令別(4.5.6年生) |

技術開発報告書

|  |
|--|
| 実 施 経 過  |
| <p>ススキ<sup>刈</sup>落<sup>が</sup>が造林木の成長を阻害する要因のうち、草量(草高)に視点をおき造林木の樹高と草高の相対的な関係を設置区~全刈区間に5段階の処理区を設け毎月のススキ草高刈りそろいをおこない成長量を継続調査し阻害度を求めるとともに、その表示法について検討した。</p>   |
| 開 発 結 果  |
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. スギ 樹高1.0m区では全刈区に対し放置区の成長阻害度は、樹高総成長量で20~40% 1.5m区では放置区でさえ阻害度は皆無という結果を得た。</li> <li>2. ヒノキ 最終とりまとめ中であるが1.0m区では、全刈区に対して放置区の成長阻害度は、樹高成長で有意な差は認められず、概直径で50%前後の阻害を受けそうである。</li> </ol> |
| <p>期は現行下刈作業体系よりも2ヶ年前後早めて、さしつかえないという結果をさせるには、さらに資料収集が必要であることが指適され(即ち全局的区域の広ど)47年度管内の10営林署を指定して、ススキの成長経過と造林木の成長経過に調査を実施する。</p>   |